日本の住生活についての史的考察(第1報)
—— 古代にみる住生活 ——

野　津　哲　子
(被服構成学研究室)

The Historical Study of Japanese House Life (part 1)
— Development of Ancient House Life —

Tetsuko NOTSU

1. はじめに

私たちは，それぞれの住まいで寝る・食べる・団らんをするという毎日の生活を営んでいる。この生活は，何らかの仕事に従事しながら，いろいろな社会の人と関係をもって，住まいを中心に生活が行われている。住まいの中での家庭生活は，社会構成の基礎単位であり，人間生活の精神的なよりどころともなっている。これまでにわれわれの祖先がつくりあげてくれた住まいのあり方について，何の疑問も持たないで生活していた人，また一方では非合理的なあり方に疑問を感じ，よりよい今日の住生活のあり方を，何らかの方法でつくりあげようと考えている人も多いのではなかろうか。

住生活は，原始時代の人々が生活の場としての住まいをもつようになってから，現在にいたるまでの間に変化発展してきたものと考えられる。生活に対する住まいの機能や役割は，社会的条件によって，さまざまであったと思われる。したがって今日の住生活は過去の生活を背負っていると同時に将来への発展をも含んでいる。今日の私たちの住生活がどのような状況の下に，どのような場所で営まれていたかなどの過程を知るうえに，その変遷を歴史的にみることは重要である。

そこで本研究では主として，日本人の住生活の歴史的変遷について考察を試み，現代住生活のもつ諸問題解決の一資料としたい。

2. 原始時代の住生活

2—1　旧石器時代

日本民族は本来土着の民族ではなく，古い伝説では高天原から移住したことになっている。しかし高天原がどこであるか決定しにくい。今日の学説では南方とアジア大陸から太古に移住して来て，土着民などと混血したものであるといわれている。その民族がどのような民族であったのか学説が定まらない。現在の学説ではアイヌの祖先が中心をなしていたと考えられている。この民族は後に蝦夷と呼ばれていた。この蝦夷の状況については日本書紀景行天皇の巻にその記事が見えている。それにはその性強暴で争闘を事とし，村に長なく互に盗略し，男女父子の別なく，冬は穴，夏は樹上に樔を作り，毛皮を着ている。恩をうけては必ず忘れ，怨をうけては必ず報いる云々とあるので，その生活の一般を推測することができる。以上の伝説でも知られる通り，彼らは理性に欠け感情・本能の命ずるままに行動をする。食料を主として山に狩して猪・鹿・雉子を弓矢でとり，海・川へ行って貝類をとって生のまま食い，魚も鯛・鮪・鰹・鮒・鰻などを釣り，山幸・海幸で生をつないでいた。野生の米麦・瓜類・果実を食べるのに火食を知り，木と木を摩擦して火をつくり，焼く・煮る・蒸すなどしていたといわれている。器具は石を擦って作った。石庖丁・石斧・石臼・石鏃などがそれである。静岡市の登呂遺跡から

木椀・木鍬・臼・杵なども発掘され木器が使用されていたことを物語っている。土器もあって土をこねて手作りとし，いろいろの型で押え，低い熱をかけて焼き，上から細い土を盛り上げて浮彫の感じを出したり，木片などで押えたり沈ませたりして文様を作った。住居も登呂の遺跡その他から発見されている。土地を一尺余り円形・楕円・長方形などに掘り下げ，この周囲に皮付の丸太を土中に突込み，垂直または斜に組立て上は茅で葺いたもので，屋根に入母屋・円屋根があり軒は地に接している。住まいは身体の保護・休養・育児のために必要なものであるが，それ以外に古代では他人の襲来・掠奪・害虫・獣類の被害をさけ，家財・収穫の保存にも必要であったから住まいの建築は手広くなっている。蝦夷の伝説によると親子兄弟の愛情もなく，部落に統一がなかったように考えられているが，この遺跡を見ると古代人は進化した人間性を備え，幸福な勤労生活を楽しんでいたのではないかと考えられる。倭民族の根拠地を高天原と述べたが，これは南方の地域であったのではなかろうかといわれている。その代表者は伊弉諾であった。アジア大陸から本土に入った民族は出雲種族で，伊弉冊はその代表者でこの両者が結婚の祖神となっているのは，両種族の結婚の最初を意味するからである。このようにして天照大神・月読命・素戔嗚尊を生んだのである。天照大神は偉大な女性で人徳高く，名声は宇内にとどろいた。神功皇后に至っては韓土に遠征して国家統一を志した。日本では古代から偉人は尊敬を払われ，その子孫もこれにつぐ尊敬を受ける傾向があった。天照大神は孫に日本統治を委任し，その曽孫に磐余彦尊を出した。磐余彦は日向から大和までの反抗者を征服して，大和を国の中心とし，橿原に第一代の天皇として即位した。これが神武天皇である。政府は政治と軍事とに分け，政治は祭政一致の政で神祭りはおのずから国を平和に導くものと信じられた。社会組織は皇別・神別・蕃別に分けられたが和親の関係を失わなかった。古代の子供は両親の慈愛によって家庭で育てられた。母親がよくその子に神の訓を守らせて，教育を口で授けたことは古事記に春山霞壮夫（かすみおとこ）の母が「よくこそ神習はめ」といったことでもわかる。父親が時折り子供に試錬を加えて，その技能を試したことは素戔嗚がその子，大国主に野に矢を放って捜させて，野を焼いたことでも知られる。古代人の生活はきわめて簡素であったといわれている。食物はただ腹を満たせばそれで満足したようである。主食は米で玄米であった。稲を臼でついて籾を落として蒸す，これを飯（いい）といった。その他栗・稗・麦などをも食べたのである。この五穀は保食神（うけもちのかみ）の死屍から生えたと伝えられている。火は燧石で火を斫り，あるいは木を削って棒を作り，これを木の上で揉んで火を出した。野菜は韮（にら）・薤（ところ）・薑（はじかみ）などがあり，筍の名も見えている。家はこのころになると，土間は雨の多いわが国には不適当なので，黒木皮付の掘立柱を垂直に立て，屋根は棟を造り垂木を渡し四注・入母屋・切妻などの形に作り茅藁などを上に葺き，竹を並べて床を造り天井はなかったと伝えられている。木と木とを連結させるには葛で結び合せたらしい。大殿祭の祝詞に掘り固めたる柱，桁，梁，戸，牖の錯ひ動くことなく結べる葛目のゆるびとあるのはこれを示している。この柱の中で中央にある一本の柱を心の御（み）柱といい，大国主命の旧居を社とした出雲大社にも本殿の中央にこれがあり，伊弉諾，伊弉冊の結婚の時も八尋殿の心の御柱を左に旋って結婚されたと伝えられている。千木（ちぎ）・鰹木（かつおぎ）という棟木の上の部分についてもいろいろの説がある。千木は棟木端の合掌から変化したという説と，現在南洋パラオ土人の家のように，棟木の抑えであるという説が重きをなしている。周囲は丸太を切って横たえて作り，土で塗りこめる塗籠も豊玉媛の産室（うぶや）に例があり，大嘗（なめ）祭の悠紀（ゆき）・主基（すき）殿のように近江の筵で張りつめたこともあったらしい。出入口に大石をおいて開かないようにしたこともこれを物語っている。周囲には椽（えん）を設けた。これも南方系で床は高く上り口には丸太を半さいにして架けた。この家の内部は一室のこともあり大嘗宮のように二間のこともあった。この境には仕切りとして障壁の板や絁（きぬ）垣・綾垣などといって絹・文様のある布を垂らした。埴輪によると二階，四注造の窓付もあり，倉庫式のものもあった。家の境は柴垣といって柴を立てて竹で挾んだものである。入口には鳥居形の黒木の門を作った。神明鳥居はその最も古い形状である。家は神代以来妻ができると新しく造られ，これを妻ごみということは素戔嗚の歌にある。屋内の調度は黒木の柴でつくった据机（しもと）という台や黒木の箱があって坐るには菅で編んだ菅蓆（むしろ）文様のある綾蓆，また藁・こもを編んだものもあった。夜の照明は地上に火を焚き土器に魚油を入れて下に三本の木を結んで台とし，油に裂をつけて点火したのであ

る。以上のように生活は簡素であった。また生活は自由で何ら為政者の圧迫も強制もなく自然に即して楽しく生活していたように思われる。

人類が文化を生み出したときが歴史のはじまりであるといわれているように，文化は人間がその意思によってつくり出した有形・無形のすべてのものを言うのであるが，具体的な目印として人類が生活用具をつくりはじめたときを歴史の第一歩と考えてよいのではなかろうか。文化が早くから開けたメソポタミア地方が新石器時代に入ったのは，紀元前8000年ごろ，ユーラシア大陸に新石器文化が普及したのは，紀元前4000～3000年ごろといわれている。メソポタミア地方に金属器文化がはじまったのは，およそ紀元前4000年ごろのことであったらしい。日本に隣接する中国に青銅器文化の時代がきたのは，紀元前16世紀ごろであったといわれている。中国における鉄器文化は，紀元前4世紀には広く普及していたことは明らかである。

日本人の祖先は，ある時期にこの土地に入ってきたものであると考えられている。同じように日本の文化も，この土地で発生したものではなく大陸その他海外の地域から伝わってきた文化である。したがって日本最古の文化の発達段階は，エジプトや中国のようにその土地で自発的に成長した場合と異っている。たとえば日本の縄文文化は新石器時代に相当するのであるが，新石器時代といっても日本では農耕・牧畜を知らない自然物採集の経済しか行われていない。牧畜などは，後世まで主要な産業とならなかった。鉄器時代に入っていた前漢の文化の波及によって，金属器文化への時代に入っていったのである。大陸諸民族における文化発展の段階は採集経済から農耕経済へ，石器文化から金属文化へ，無階級社会から国家社会へと基本的な発展をとげたのである。そこに人類文化史の普遍的な共通性が確認される。歴史発展における人類的な共通性と民族的な特殊性，その交錯を明らかにすることが歴史的にみる意義があると思われる。

日本歴史の舞台である日本列島は，かって大陸と陸つづきであったといわれている。地質学で洪積世とよばれる時代には，ナウマンゾウやオオツノジカなど，いろいろな動物がたくさん住んでいたといわれている。今から数万年前に人類がこれらの動物を狩猟しながら列島の地に移り住んだようである。それは各地の洪積世の地層から土器を伴わない打製石器が多数発掘され，洪積世に属する人類の骨も少し発見されてきたことから証拠だてられる。この時代の文化は，おもに打製石器を使用するだけで，土器を製作するにいたっていない。時代が進むと石器の機能が多様化し数多くつくられるようになり，狩猟活動もさかんになった。日本で最も古い文化は縄文文化であるとされていた。1949年群馬県の岩宿で洪積世の地層と考えられる関東ローム層から，土器をともなわない石器群が発掘されて，縄文文化に先だつ石器文化の存在が明らかになった。全国でこの文化に属する打製石器が発見され，生活遺跡なども見い出されるようになった。また石器の発達過程についても，打ち割り用の石器やナイフのような小形石器を用いる段階から狩猟用の石槍を使う段階へと進んだことが知られている。このような先土器文化は大陸の旧石器時代に相当するものといわれている。この時代の人類については1957年愛知県牛川，静岡県三ケ日その他で洪積世の地層から，ゾウの牙などといっしょに人類の骨が発見されて，先土器文化を残した人々の実たいが明らかにされつつある。これらの人骨には，その特徴に次の縄文時代の住民に通じるもののあることが注目される。すなわち当時の人々は一定の場所に住居を定めておらず，食糧となる鳥やけもの魚貝類・草木の実を求めて山野・海・川に転々として生活していた。したがって樹蔭・樹洞・岩庇・洞窟などをそのまま利用して生活を営んでいたことは想像される。富山県氷見の大境洞窟，高知県の竜河洞などに住居として使用していたことが，石器，土器などの発掘で実証されている。

2－2　縄文時代

先土器時代のつぎには縄文文化の時代が展開する。洪積世末から沖積世はじめにかけて気候が温暖になり海面が上昇して，大陸から離れて日本列島が生まれたらしいといわれている。この自然環境の変化に応じて生活用具の改良が進んだようである。弓矢の使用開始，土器の発明は新しい時代のはじまりを告げる目印である。先土器時代の末期に出現した磨製石器は，縄文時代には丸木船の製作に用いられて漁撈活動のわくを広げ採集経済は一段と進歩した。縄文土器の形は多種多様で，石工技術とともに当時の工芸の進歩の高さをうかがわせる。縄文時代の住民は孤立した日本列島でこのように独特な新石器文化を発達させていったのである。先土器文化時代の人類と縄文時代との関連については，つながり

が認められつつあるといわれているが，くわしいことは明らかでない。しかし大陸から孤立した島々で原始文化をはぐくんだ縄文時代人は，日本人の祖先と見てよいと思われる。この人類が，あるいは生活の変化による進化によって，他の人種との混血によって体質の変化をつづけながら，現代の日本人になったものと考えられる。

縄文時代の人々の社会生活は，山野でシカ・イノシシを捕え海・川・湖沼で魚・貝をとり野生の食用植物を採集して食料としていた。狩猟・漁撈・採集の生産活動には各種の石器・骨角器が用いられている。石斧・石匙・石鏃・石槍・石皿・すり石・釣針・もり・針・石錘（せきすい）などの道具は必要に応じて組みあわされ，数量をふやし改良も加えられながら，縄文文化のゆるやかな発展をうながすもとになった。横穴住居は人類が最初につくった住まいと考えられている。人間の数が増えてくると自然の洞窟だけでは足らず，人工的に山腹などを掘り，自然の穴にならってこれを住居として使用したと考えられる。外国では現在でもこの横穴住居の一種と思われる住居に居住している民族もあるといわれている。日本の場合は素朴な石器で掘る関係で土質が柔かく，多い天災で崩壊し多くは見られない。埼玉県松山町の吉見の百穴は横穴住居跡であろうと推測されている。以上のように狩猟生活から農耕生活に入ると住居は一定の土地に定着し，水に近い場所に集団的に設けられるようになった。

古代人が家らしい住居構造物をつくって住んだという証拠は，竪穴住居跡においてはじめて見ることができる。竪穴住居は地面に平均して長径6m，短径5m位の長円形または隅丸の矩形，深さはいろいろであるが，平均50cm位，深いものでは1m位底の平らな穴をほり，この穴の上に樹木の幹を用いて柱を立て，細い木・枝で屋根組をし木の葉や草で屋根を葺いたもので，遺跡としては竪穴や地面につくられた炉や柱穴があり，遺物として石器土器がある。竪穴住居の地上部分は4本の柱を柱穴に立て，その上に井桁に組んだ梁をのせ，それに周囲から垂木（たるき）をたてかけて，その上に屋根を葺いたものであろうと考えられている。縄文時代の竪穴住居跡は，わが国では関東・中部・奥羽など東日本に多いといわれている。登呂遺跡はこの時代の住生活をよく示しているものとして有名である。寒さを防ぐのに適した住居形式であったと考えられる。そしてそれが存在する場所は高地・高台が多く，しかも割に散在している。これは狩猟，採取の生活からきたもので，獲物や採取物の多いところに単独または家族で住み，その領域を一定範囲確保する必要があったためと思われる。したがって竪穴住居での住生活は，夜間の睡眠や休息，雨天の避難や寒季の防寒などで，大部分の生活は戸外で行われていたと思われる。横穴式に比べて空気の流通がよく湿気も少ない。しかし外気の気温変化は横穴よりも一層多い。それでも冬暖かく夏は涼しかったと思われる。この竪穴住居は庶民住居として，わが国では奈良時代頃まで存在していたらしいといわれている。多くの遺跡から，かっての様子が推量される。地面を掘り下げずに土地そのままの高さを床とした平地住居も，場所によってはつくられていたようである。平地式の住居は埴輪などによってその様式をうかがうことができる。竪穴式住居が防寒上の効果があるのに対して，雨と湿気の多い日本では住まいとしては不便であるので，土間や石を床とした平地に住居を建てるようになったものであろうと思われる。夏季特に多雨多湿高温の日本列島での生活に穴居が営まれたことと，北方寒帯民族の住居形式との間になんらかの関連があるように思われる。この時代の人々は1個の住居に5人前後が住み，それが数個まとまって生活単位としての集落をつくっていた。住居がかたまってつくられていること，大勢で協力しなければ使えない道具が発見されていることなどから見て，かなり緊密な共同生活が営なまれ，それも時代が進むにつれて大規模になっていったことがわかる（縄文時代の中期，後期には海岸部に環状，馬蹄形の大貝塚があらわれ山岳地帯にも大規模な集落がつくられている）。しかし政治的権力をもった支配者は生まれておらず，国家をつくる段階に入っていなかった。

縄文時代には，土偶の他石棒・岩版などのように実用品ではないが呪術のために用いられたと思われる遺物が発見されている。これらは自然の支配をきびしく受けた当時の人々の，自然界に対する考え方をうかがわせるものである。ところで縄文時代の末期には人口の著しい減少が認められるが，このことは長い期間にわたった採集経済が行きづまってきた結果であると考えられている。この時期に呪術的な遺物の種類や量が増加し，共同墓地に呪術師かと推定される人物が埋葬されていることは，当時の社会を維持するために，なんらかの社会的規制が強まり

呪術のはたす役割が大きくなったことの反映であろう。縄文人の生活用具は前述の石器類の他に骨角器・土器類・木具で狩猟漁撈用として弓矢・角製のヤスリがあり食器と思われる木製椀・高杯もある。土器は食器の煮沸・貯蔵用にあてられ生食・火食が行われたであろうと推測される。日本人は縄文式時代の後期から農耕生活をはじめるようになり，日本の生活に大きな飛躍をあたえ衣食住すべてに渡って，この新しい段階の生産関係が，弥生式時代に大きく発展する。以上のように今日のわれわれでは理解しにくい集団のしくみ・行動が想定されるところに原始社会の特色がある。

２－３　弥生時代

弥生文化への転換は，採集経済のゆきづまりに当面していた西日本の各地で急速に進んだ。稲作農業の受け入れは，日本列島に従来から住む人々によって行われたが，なお朝鮮南部から農耕技術をたずさえて渡来した人々との果した役割は大きかったと考えられる。西日本の平野に根をおろした稲作は，弥生時代の中ごろには東北地方の一部と東日本に広く普及し，農耕社会はいっそう広がった。静岡県の登呂遺跡で発掘された水田跡は，大がかりな農業経営の様子を今日に伝えている。近畿地方・北九州方面では大集落で銅鐸・青銅武器の製造が行われ周辺の集落と交易していたこともわかっている。農耕社会を特色とする弥生式時代は完全な定住生活を営むようになったことを意味する。定住生活は恒久的な住居を営み，その土地に適応した衣服を作り出し，生産と生活の道具を豊富に作り出し，食生活の不安を除去し，食生活の一定の様式を作り出す。集落は人間社会の新しい秩序を創造し，原始共同体と人間社会関係を定着させたと考えられる。弥生時代の竪穴住居の屋根がどのようにしてつくられていたかは遺物が残っていないので不明であるが，一応次のように考えられている。すなわち４つの柱穴に主柱を立て，その上に井桁の形に梁材をおき，これに竪穴壁周囲の地上から合掌や垂木をこの上によせかけて屋根の骨組をつくり，これにカヤ・ワラなどで屋根を葺く，この屋根の頂には切妻の屋根を重ね切妻の両方に煙出しの窓をつける。そして入口は妻入である。このような構造は中国地方で砂鉄を精錬する炉を入れる高殿（たたら）という小屋の構造などから推察されたものである。登呂遺跡には柱穴に柱材の根元の部分が土中に残って発見されている。この時代は金属の使用もはじまり，青銅製の遺物が発見されている。農耕生活に穀物貯蔵の必要から，住家の近くに径１～２ｍの円形竪穴を掘り，その中に穀物を貯蔵した（板村遺跡・大和唐古遺跡）。しかし多雨多湿の日本の自然環境で穴蔵が不適当であったことから，常時乾燥を保ち得る高床の倉庫を建てたものと推定されている。香川県出土と伝えられる銅鐸に高床建築を思わせる絵が描かれており，長い梯子が床にかかっている。前述したように弥生時代に住居の構造も進化発展してきた。また農耕作業には集団力を必要としたこと。このような時代における住生活はどうであっただろうか。農耕が共同作業で行われたように，住居をつくることも共同作業であったであろうと思われる。屋内生活はこの時代でも休養・睡眠が主であったであろう。炉は屋内にあるが暖をとるのが主であったのではないかと思われる。炉の位置は床中央であるが，中には一方の壁に近くかたよったところに，つくられたものも発見されている。これは平面の分化のはじまりといえるかもしれない。住居の中では床に直接腰をおろす座式の生活であったと考えられる。

静岡市南郊の低湿地に高床倉庫の跡が発見されている。これは農業生産を主とした協同体の集落と見られる。弥生期には稲作農耕と狩猟漁撈ともに行われ，台地に竪穴，低地には平地住居がつくられたと思われる。当時金属器の使用により諸種の木具も製作され，建築技術もまた格段の進歩をなして，住家も高床構造に発展したのではないかと思われる。弥生時代の後期から日本人は文明をもち，やがて古墳時代に入るのである。

２－４　古墳時代

古墳時代には，大和政権や地方豪族の統率のもとで堰（せき）・堤（つつみ）・溝（みぞ）などの建設が進み乾田開発がさかんに行われた。一方農民による谷間の水田開拓も進むようになった。稲は弥生時代以来の直播，穂首刈りが行われたが，あらたに田植えと鉄鎌を使った根刈りが普及し，わらの加工もできるようになった。食生活においては煮た飯からこしきでつくる強飯（こわいい）を食べるようになった。しかし雑穀や野生の植物も大切な食料であり，狩猟・漁撈による動物を食べる習慣もつづいていた。食事の容器には，はじめ土師器（はじき）が用いられたが，須恵器（すえき）の生産が発達するにつれて須恵の杯などが民衆にも普及していった。民衆の住居は方形の竪穴住居で，内部にはかまどがおかれて煮

炊をいっそう容易にした。豪族の間では床を高くした家屋に住む者があらわれ，これが後世まで日本家屋の基本的な形式となった。古代初期では宗教があらゆる生活の分野にしみこみ，政治も経済も芸術も，みな宗教と深く結びついていた。村の共同行事である祭りを行う場所には，神社の社殿が建てられるようになったが，後世まで山や森や石などをそのまま神社とするならわしも残っている。出雲大社や伊勢神宮の建築様式は，7世紀ごろに完成したものと思われるが，古い形を伝えており直線の単純な構造美をもっている。白木または黒木の木材と，かや・檜皮の屋根が日本の伝統的建築の特徴である。農耕生活が生産経済の成長をもたらし，集落定住の共同社会の階級へと発展したのである。近畿を中心として西は九州，東は東北地方にいたる地域に大小の古墳が築かれた時代である。墳丘の巨大なものは当時における支配者の権威の誇示とも見なされるのである。当時の家の形態は古墳の副葬品である家形埴輪で知ることができる。庶民の住居は当時の竪穴遺跡（東京都志村小豆沢・塩尻市平山遺跡）が発見されていることから，粗末な小屋の竪穴住居か，あるいは平地の土間生活であったのではないかと想像される。住生活の面からみると，この時代にはまだ竪穴式が残っている反面，平地，高床といった進んだ住み方も行われていることがわかった。このちがいは身分や階級の差によって起ったものと思われる。住まいは一室住居である。家形埴輪や家屋文鏡によると当時の家屋には開口部が少ないようである。これは生活時間の大部分が屋外で過ごされ，家の中での生活は主として夜間の睡眠休養であったためと考えられる。高床住居では床は板張であったであろうと思われるが，平地住居では土間であったと考えられる。茶臼山埴輪は主屋，副屋とも入口の敷居がきわめて低い。窓の位置も低いことから推察できる。すなわち竪穴住居の生活様式が引きつがれているのである。一般庶民の住生活はどうであろうか。家屋文鏡の竪穴住居はそれをあらわしていると思われる。長野県平山の住居跡は古墳時代のものとされているが，これは平地住居で，藤島亥治郎博士の復元図によれば低い側壁をたてた入母屋のカヤ葺で，棟に切妻の屋根をのせている。土間の一室生活であったと思われる。

この時代に日本人は大陸との交流から，青銅器を使用するようになり，前代に使用しはじめた鉄器もいっそう豊富に使用するようになった。階級社会の発生にともなって，衣食住に階級的差別があらわれたこと，すなわち古墳から発掘される豪族の服飾や食器具は，そのことを物語っている。原始時代の日本人の文化や生活様式が歴史時代の発展のテンポよりおそかったこと，また常に自然力によっておびやかされ，断絶しがちであったと思われる。日本書紀に「冬は穴に住み，夏は木に宿る」という意味のことが書かれている。この時代の人々は，冬は暖かい竪穴式住居に住み，夏は涼しい高床式住居に住んでいたと考えられる。庶民の家も立派になり，平地は高床でない切妻造の家がつくられたようである。関東地方・東北地方の発達をみると竪穴式の住まいが行われていた。後の貴族住宅は高床式住居の，庶民住宅は竪穴式住居の発展したものとして日本の住宅史上に二つの系列を伝えているのである。古代住居は今のわれわれが観念的に考えるほど，居住の環境条件が悪かったわけではないようである。したがって竪穴住居は，のちの奈良時代ごろまで広く使われたのである。

以上のことから日本の自然の移り変りは，そこに住む日本人を，あらゆる機会と方法で鍛えてきたと思われる。こうして日本人は原始の時代から自然のはげしい移り変りの中で，それに耐えそれを生活の知恵の原動力として日本民族を成長させてきた。その証拠は古代日本人が伝えた巧妙で適切な，この自然への調和のための工夫が，身辺の生活様式，あるいは幾多の異質文化の摂取同化の様式，そして生産の場での高能率技術の開発と合理的な労働様式の発明である。さらに日本人の芸術・文学，信仰や精神生活さえも，自然との有機的な関連があって，ここに日本文化の特色を形成してきたということがわかる。日本は気象的には一応アジア・モンスーン地帯にある。湿度が高く多雨性地帯で米の成熟に適し，このため米作農耕が発達して，家族形態，協同体様式，信仰生活や世界観，ジンクス，暦まで米作農耕社会を前提とした生活習慣が，日本人文化の基調となったのである。

古代日本人の知恵は衣服，食事，住居，生産，思想，信仰，芸術，年中行事にその風土の中に調和した。すぐれた文化を残し，その知恵を現代に伝えてくれたのである。現代の日本人の生活は極度に欧米化し，日本古来の自然への調和という生活と，その知恵を失いかけているが，かって日本人はその生活

文化の中に日本民族のすぐれた資質をいくつも残したことを，これからさまざまの実例をもって示し，この日本民族の世界に誇るべき知恵とその歴史を自然をもって世界の民族の健康で平和な発展に役立ててほしいものである。住居は人間生活の拠点であるといわれている。原始時代には自然の洞窟を住まいとし寝ぐらとしていたことは前述の通りである。人間以外の動物に巣があるように，人々もそれと同じような意味で風雨寒暑の自然の脅威や外敵から身を守るために，避難所としての住生活を営んでいたのである。そこでは，もっぱら自己の生命の維持を目的とし，避難，休養，育児などの場として考えていたのに過ぎなかった。住居が単に避難の場として考えられるだけではなく，その他の複雑な機能を要求するようになって発展してきている。ことに今日では世界文化の交流が盛んとなり，わが国の伝統的な住習慣に加えて他民族が永い間の歴史をかけて醸成してきた生活文化を取り入れて，現代社会の機構に適した住まいのあり方を望むようになってきている。時代がどのように変わろうとも，住生活は人間生活の創造の場であり，人格育成の場でもある。社会に対して家族の生活を守り家族内での円満な生活を築く場でもある。

3．むすび

日本列島における旧石器時代～古墳時代の人類はいつごろ，どういう動機で住生活を知ったのであろうか。深い謎いの世界と連なるこの間に関してつぎのようなことが推測された。

悠遠な先史時代のある時期に，人間らしい動物が久しい間洞窟生活を営んでいたということは，各地方の遺跡によって明らかである。かすかに刻まれた洞窟の壁画や浮彫などの，いくつかの資料によって当時の生活をある程度知ることができる。それらは原始人が，もっぱら狩猟と食物拾集をしていた，かなり長い時代の生活記録でもある。彼らはきわめて粗雑な石材製の道具をもって，自然に供えられた産物を獲得することに精いっぱいであった。魚類・果実・野獣など自然界のあらゆるものが，原始生活の糧となったわけである。洞窟の壁画には，馬・牛・マンモスなどの躍動的な姿や闘志に満ちた狩猟人，時には動物仮装の不思議な人物像まで描かれ，それらは野生的な原始生活をまざまざと物語っている。こうした生活のさ中にあって，生きるためのあらゆる工夫や道具の発明が少しずつではあるが，絶えず前進していた。食・住の方法はこうして少しずつ改善されていったのである。石器が一段と改良され，鋭利な道具が現われると，これによって農業や牧畜が始められ，久しく営まれていた自然経済は，生産経済という新しい段階へと発展した。当時機織りや農耕，あるいは陶器の製造に従事したのは女性であって，彼女らが人類生活の重要な役割を果したことによって，母権的な民族の原始共同体が発生したのである。原始人の生活と絶ちきれないものに，呪術的な数々の事例がある。洞窟の壁画は，その前で収穫の成果を祈るために書かれたといわれている。また現存未開人の文身の一つ一つに宗教的意味があること，古代人は装身具を明らかに護身の意味をもっていたこと。原始時代において生活と芸術と宗教とは密接な関係をもっていたと思われる。生産のための道具が幼稚な間は，生活は共同でなされていた。財貨はすべて共同体のもので，闘争もなく平和な生活が続けられた。器具の製法がしだいに改良され，鉄という最も優秀な道具が現われると，人間社会には複雑な歴史時代が展開されたのである。

日本は季節の変化の多い国であるから，一般庶民の住居は地下20～40cm位丸く掘って，そこへ直径6m位の屋根をかけた家に住んでいた。穴には4本の柱を立て，ハリとケタを渡してあったが，外から見ると大きな傘をかぶせたような型であった。縄文時代の竪穴の家や原始入母屋造りの家の埴輪がこれをよく物語っている。また家屋文鏡には，原始入母屋の平地家・高床の家・切妻造りの高床の家が描かれている。冬は暖かく夏は涼しい家で，しかも耐震建造物としては，安定性をもっている。耐火性がない以外は合理的な住生活であった。古代人は原始的ですべて愚かと思うことはまちがいで，人間の文明特に技術などは，必要度によってある時期には限界に達し，それ以上は逆に人間に対する公害となってあらわれる。むしろ文明社会の公害時代に生きるわれわれこそ，原始の自然時代にかえらなければならないのではないでしょうか。

西日本から原始国家が形成され，西からしだいに日本国家ができ上っていったのである。そのでき上った国家勢力が東に広がるのと平行して，農耕文化も広がり関東から東北地方に押し広げられた。日本において米の文化による古代国家が発達の形態をとって行ったのも特色といえる。

古代の原始社会においては，生活の条件というよりは生産の手段も狩猟をただひとつの生活手段として，ある時期，ある場所にとどまって，それらの食糧を得て，なくなれば他へ移っていったのであろう。もちろん気候の寒暑による変化も住まいを移す要因になったであろう。それがいつのころからか生産手段が農耕に変化すると一定の土地が必要となる反面転々と移ることはできなくなり，ここに簡単ながらも固定化された住生活が必要となったのである。このようにして自然のかくれた場所から人工的な構築物へと発達していったものと思われる。ここに地域社会が芽ばえ人間生活らしいものが発生する。このようにして文化が進むと，人間の生活を入れる容器として家も発達し，時代と共に変化していくのである。現在の人間社会の最小単位は家庭である。家庭は個人主義も家族主義もとらず生活能力と共に形成され，ここに子孫繁栄の基礎をつくる。今や家庭は生活の場であり，人間文化の温床でもある。人間の生活は家庭の生活へと向上し，住まいはその家庭生活を果たす一大基地となるのである。したがって住まいのよしあしは家庭生活を左右し，ひいては社会生活の向上の進度の遅速に影響を与えるといっても過言ではあるまい。ゆえにこの生産をより合理的にかつ美的に快適に営めるような住生活の開発は，技術的にも精神的にもいよいよ必然性が強調され，それの修得のいかんは人間生活の向上いかんにかかわるものであると考えられる。人間の文化が進むと住まいもそれに対応するだけの機能を備えるようになる。住生活が豊富になり多方面にわたると，単一なものではすまなくなって室空間の多いことが必要となって分化をおこす。最初一室よりおこった住まいも隔壁がある方が生活的にも便利であるため，間仕切りがつくられる。現在では家の構成は常に複室であり，建物は室の集合がもとになっている。生活の中心が戸外から室内に移ってくるので室内生活が豊富になり，室内そのものの巧利的な要求が必要となってくる。文化の高い人間においては本能的，生物的な満足だけでなく，生理的，精神的，家庭的，社会的により正しく，楽しく，美しく生きる意識をもっており，しかもそれは現在から将来に望みをかけているのである。秩序のある社会では外敵が一応ないとしても，集団から個人生活を守るプライバシーの確保される静かな生活空間が必要である。また生理的に冬暖夏涼で快適な経済に豊かな住生活を楽しみ，高い文化的要求を満たすものでなければならない。特に近代人は衣食住の根本的な要求を満たすについても，高度の保健的，文化的，審美的欲求をもっており，それが絶えず向上しつつあることが動物の巣と本質的に相違するところである。もちろん人間の生活は衣食住だけでなく，育児，教育，娯楽，社交，信仰など多方面にわたるが，およそ住生活と無関係なものはないといってもよい。このように住生活は全生活の基盤となっているのである。衣食住というのは，それぞれの生活の軽重をあらわす順位でもなく程度でもない。

以上おおよその住生活内容の変遷を述べてきたが，これでわかるように気候風土，習慣の相違は同国，同民族の生活態度を変えるものである。住宅の近代化が進み，その地方にそった正しい住生活のあり方を再認識して合理的，美的，経済的な生活習慣と住生活を身につけるよう心がけなければならない。現代住生活の目的として子供を生み育て(Reproduction) 英気を養い元気をつける(Recreation) 疲れをいやしくつろぐ (Relaxation) の三つを 3 R と称することがある。したがって住居は生命・健康・財産が安全であることは当然で，さらにそれらの発展と充実が期待できるような生活の容器でなければならない。住生活の目的や住意識は文化の程度や時代感覚によって異なるが，これを現代という時点において一般的生活水準を基底においた住生活を対象として，その本質を考察してみることが今後の課題である。

参　考　文　献

1) 花岡利昌：概説住居学，光生館（1984）
2) 狩野雄一他 3 名：住居学，建帛社（1971）
3) 大須賀常良：住居学，彰国社（1970）
4) 武田満す：理工学社，（1971）
5) 小泉正太郎他 3 名：住居学，建帛社（1983）
6) 中野正男他 2 名：住居学概説，建帛社（1968）
7) 斉藤外二：新しい住まい方，彰国社（1968）
8) 吉坂隆正：住居学，相模書房（1969）
9) 塘　一郎：これからの住生活，彰国社（1977）
10) 住田昌二：現代住居論，光生館（1984）
11) 太田博太郎：日本の住宅，彰国社（1982）
12) 藤島亥治郎：日本生活変遷史衣食住，島根新聞社（1960）
13) 江島　務：日本服飾史要（1954）

14) 奈良本辰也：日本庶民生活史１，河出書房新社（1961）
15) 喜田川守貞：近世風俗志，聖光社（1949）
16) 武田祐吉：日本書紀，朝日新聞社編刊（1953）
17) 竹之内静雄：日本文化史１，筑摩書房（1966）
18) 古田　晃：日本文化史２，筑摩書房（1965）
19) 神田秀夫他１名：古事記（1962）
20) 久松潜一：風土記（1959）
21) 国民生活センター編：住宅と生活，光生館（1982）

（昭和59年10月31日受理）